

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷一十五第

月二十年五十和昭

口繪 紀元二千六百年記念展觀會場寫眞

論叢

經濟變動と租稅政策……………經濟學博士 汐見三郎

中國に於ける特殊通貨としての匯割……………經濟學博士 小島昌太郎

經濟の統制について……………文學博士 高田保馬

研究

恐慌の歴史性と失業の歴史性……………經濟學士 桑原晋

資本不足と過剰生産……………經濟學士 青山秀夫

丹後機業の生産構造……………經濟學士 堀江英一

說苑

蠶種輸出に對する思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

日滿支經濟建設
要項に於ける産業分野の決定について……………經濟學士 菊田太郎

公益優先……………經濟學士 鈴木總一郎

ピグーの『戰時經濟論』……………經濟學士 有井治

記事

紀元二千六百年記念・經濟學部展觀

附錄

外國雜誌論題

本誌第五十一卷總目錄

日滿支經濟建設要綱に於ける 産業分野の決定について

菊田 太郎

現政府は、組閣當初の去る八月一日發表した基本國策要綱に於いて、日滿支三國を一體とし、大東亞を包容する協同經濟圈の確立を明記し、三國經濟の自主的基礎強化を高調したが、本朝の新聞紙には、内閣情報部當局談として、基本國策の右の部分を一段と具體化した日滿支經濟建設要綱骨子が發表された。

その内容を見るに、(一)國民經濟再編成の完成(二)日滿支經濟の編成強化、(三)東亞共榮圈の擴大編成の三目標、この目標に到達するための基本方針、及び、産業分野・勞務・金融・貿易・交通等の各部門別建設要綱に互つてゐる。そして、産業分野に關する項では、その「決定に方つては、日滿支三國の立地條件と、それらの經濟發展段階を考慮し、眞の有機的一體とし

て、総合的にこれを決定することが肝要である」とし、三國に於ける農業その他の原始産業を維持振興する意圖を明かにし、且つ三國のそれ／＼に配當さるべき産業部門を定め、日本では高度の精密工業・機械工業の劃期的振興、及び、重工業・化學工業・鑛業などの發展を、滿洲國では鑛業・電氣事業の劃期的發展、重工業・化學工業の發展を、支那では各種鑛物・鹽等原料の増産、及び、立地條件を具へた重工業・化學工業の發展を期し、輕工業については大陸に於ける發展を助長するの要を認め、我が國の輕工業、就中纖維工業・雜工業を逐次整理し、大陸に移動せしめることを考慮中とある。

この基本的で影響廣泛な建設要綱は、我々に多くの問題を供するだらうが、こゝでは、唯、産業特に工業の分布計畫について、若干の考察を行ひたい。蓋し、右の計畫は、三國の立地條件と經濟發展段階を考慮して定むべきものとされてゐるに拘らず、必ずしもこれらの事情に適合してゐると思はれず、従つて、若干

の修正を必要とすべく、もし現在の案がそのまゝ強行されるならば、相當の困難と不利を醸成し、廣義東亞經濟圏、特に我が國及び我が國民に對し、甚だ意義に乏しくしかも大なる負擔犠牲を課するのみならず、經濟活動に於ける有機性の高まれる今日としては、計畫全體の成否さへ憂へられるからである。

我々がかく論するのは、云ふまでもなく、かゝる計畫の意義或は本計畫の價値を決して否定するためではない。現在の世界情勢の下に於いて、形成さるべき東亞新秩序の内容を具體的にし、我が國內經濟新體制化の方策を確立することは、洵に國家の喫緊事であるから、この計畫が樹立され、公表されたことは機宜この上なきことと喜んでゐる。また、國土計畫・産業編成計畫等が單に經濟的考慮からのみ決せらるべきでなく、道徳・國防等の要請ある場合、相當の經濟的不利も亦忍び且つ克服すべきものなることは、アダム・スミス以來教えられてゐる。更に、確定不動の國是となれば、個々の缺陷を云爲せず、その實現に舉國邁進せ

ねばならぬ事も覺悟してゐる。併し、今度發表されたのは要綱の更に骨子であつて、實施に先ち更に検討、改むべきは改めて具體化される運びとなつてゐやうし、建設は十年を期間とし、その間には事情の推移に應じ、成績の如何によつて改訂されやうし、一毫の變更を許さぬものとは思へない。否、建設要綱が骨子だけで既に發表されたことは、更に完璧を期するためにも推測される。仍つて、こゝに若干の所見を記すのも、過去の經驗、現在の實情、先學の教條を考慮して、計畫を更に確實に、更に有効にし、眞に三國の總經濟力を擧げて邁進するに相應はしきものたらしめたいとの念願からである。區々の見にして邦家の大計に些かにも役立ち得れば、幸甚之に過ぎぬ。

二

前述經濟建設要綱中の産業特に工業の配置計畫について、先づ、一般的に、次の諸點が問題になると思はれる。

即ち、第一は、我が國には高度の精密工業・機械工

業、大陸には輕工業就中纖維工業・雜工業と云ふ場合、この産業分類が立地事情を殆んど無視してゐる事である。右の如き分類は生産様式或は生産物・原料の相違に基くものであるが、これは立地事情或は指向形態による區別と必ずしも一致せず、立地を問題とする場合には、後者を基準として區別せねばならぬ。例へば、等しく機械工業に含まれる部門中でも、工作機械工業・農業用機械工業等は消費地に、特に精密を要する機械製作業は大都市或は熟練労働者の居住地に牽引されるし、原料につき特殊な要求を持つ機械工業は鐵その他原料の供給源から離れ難い。また、纖維工業は概して原料・製品の運送費に對し工費の割合大きく、従つて、原料供給地・消費地と遠く隔つても、勞働力が優秀で低廉に、一般經濟條件の有利な地點に集中し得ると云ひ得やうが、それでも、製絲業は繭産地と、製線工場は亞麻栽培地と隔離することは、殆んど不可能事である。況んや雜工業に至つては、原料・消費・勞働・大都市の各指向工業を含み、その立地につき概

括的な指定は行ひ得ない。

更に、同一工業内に於いても、製品の品位を異にする工場、及び、段階を異にする生産過程は、それ／＼立地事情を異にし、結合による利益を犠牲にしても、それ／＼別の立地に指向せんとし、且つ之を實現せしむるを以て得策とする場合が少くない。具體的に云ふならば、同じ綿絲紡績業でも、高級品の製造は先進の工業地に、太絲紡績は原料産地或は勞働力の低廉な地域に指向し、セメント工業のクリンカー粉碎工程は、焼成までの工程と切離し、消費地で行ふことによつて、多くの運送費・包装費が節約されやう。

かやうに、各種工業、或は更に一步を進めて製品を異にする工場並に各生産過程は、それ／＼立地に對する要求を異にするため、機械工業・纖維工業・雜工業等と他の標準によつて區別された工業に對し、一括的に立地を指定することは甚しく不合理である。

第二に、各種産業相互間に密接な關係があつて、一體として同一地域に指向することも、意外に多數存在

日滿支經濟建設要綱に於ける産業分野の決定について

するものである。詳言すれば、先づ、大工業地域には主要工業に附隨して各種の補助工業が密集し、これら補助工業はその性質上多くの種類のものに分れる。次に、二個の工業が相互依存の關係に立ち、何れを主何れを従と定め難い場合がある。英國ランカシャ地方に於ける機械工業・紡織工業がその例で、前者は後者をその市場とし、後者は前者の援助を以て、始めて世界的意義を獲得したものである。更に、勞働力に對する要求を異にする二個以上の工業が同一地域に指向する場合がある。例へば、前記ランカシャに於ける二工業の併立は、機械工業が強壯なる男子勞働者を、紡織工業が比較的強壯ならざる分子を使用するためと見られ、また、我が製鐵都市八幡に靴下製造その他の家庭工業が發達してゐることも、顯著な事實である。かく種々の理由によつて結合する場合には、生産物・性質等を異にする數種の工業を一括して一立地單位とし、これについて指向を問題とするを要する。

以上、工業の地域的配置を問題とし、これを指定せ

んとする場合には、普通に慣用される所と異なる區別を行ひ、或は數種の工業を一團として、それらの要求する立地條件を考慮せねばならぬ。勿論、立地法則は全然背離を許さぬ鐵則たることは稀で、不利な立地にも工業を成立せしめ得ない譯はないが、その場合には餘分の施設・資材と餘分の生産費・運送費を要し、國民經濟の實質所得を減少せしめ、また産業の對外競争力を弱める結果とならう。

三

理論的に右の如く考へ得る外、我が國現在の經濟發展段階並に經濟情況に照して、内地に高度の精密工業・機械工業、大陸に織維工業・雜工業と云ふ配置が適當なりや否や、大いに考慮さるべき問題である。

即ち、第一に、内地の經濟發展段階が精密工業・機械工業の發達に適し、且つ之を要求するに至つたとしても、この事實は織維工業・雜工業の存在を不必要ならしめるものではない。詳言すれば、我が國從來の工業組成に於いて織維工業を中心とする輕工業が不均衡

に發達したのは、精密工業・機械工業製品の供給を外國に仰ぎ得たこと、勞働力の豊富であつたことに基くもので、情勢の轉換した今日、機械工業をもまた具備すべしとするは正しからう。併し、機械工業が發達したから織維工業が不要になると云ふに至つては、經濟發展段階の一面のみを見、當然存在する一面を忘れた暴論ではあるまいか。寧ろ、織維工業その他製品を需要する産業が身近にあり、これと各種の關係に於いて相互依存・共同利用の利益を持ち、更に進んでは、輕工業による資本の蓄積、經濟力の育成を基礎としてこそ、機械工業も始めて健全な發達を遂げ得るのである。この關係は、前にも若干觸れたから反覆しないが、要は、經濟が進んだ段階に於いては、機械工業をも要すと云ふべく、織維工業その他の輕工業を排すべきではない。

第二に、精密工業・機械工業のみに専らなることは織維工業その他の輕工業偏重よりは寧ろ弊害が大きいのではなからうか。蓋し、先づ、織維工業その他消費

財生産部門は景氣變動の影響を受けること割合に少く、比較的安定してゐるに對し、機械工業その他の生産財生産部門では、景氣變動の波荒らく、安定を期することは至難である。先般の世界恐慌時に於ける英國北部重工業地帯の深刻な打撃はこの事實を明瞭に示す。變動の波が荒いからとて、産業進展の重要原動力たる精密工業機械工業の發展に努めないことは、勿論時勢の進展に伍する所以ではないが、安全辨たる作用を持つ輕工業を排することは、決して得策ではないのである。次に、機械工業中少からざる部分は、鐵鋼その他原料を要すること多く、生産物の體積、重量大に、原料供給地並に市場から遠い所では、運輸機關に對する要求従つてまた所要運送費が大きいに對し、纖維工業その他多くの輕工業は、原料・製品の重量・所要運送費少く、原料産地・市場に遠い地域でも、勞働の質・量、經營能力、一般經濟組織が優れて居れば、よく之を發展せしめ得ると云ふ事情が注意される。我が國の工業が世界市場に威力を發揮し得たのは、よく特

日滿支經濟建設要綱に於ける産業分野の決定について

長を發揮し得る輕工業に主力を注いだことに基づくものが少少でなかつたと思はれる。かゝる跛行的發展に伴つた缺陷は勿論補ふべく努力を要するが、特長をことさら捨てることは、長き片脚を切るにも似て、決して適當とは思はれない。

第三に、機械工業・纖維工業は、優れた能力を有し、經驗によつて鍛鍊せられた高級豊富な勞働力を備へた地域に於いて、始めて勃興し得るものである。而して、かゝる高級豊富な勞働力は、各工業が久しい傳統を持ち、社會がこれに好適の環境たる場合にのみ、維持され育成され、決して一朝一夕に産出し得るものではない。我が國が世界の纖維工業に制覇したことに、多くの原因と共に、手末の貢を納めた時代より遺傳され、更に各種纖維工業の短いは云へぬ歴史に負ふ所が、決して僅少ではない。所で、人間、従つてまた勞働力は、あらゆる生産要素中最も移動性少きものゝ一たると同時に、一度び全體として移動すれば復元、補充の至難なものである。その結果、近き過去に

第五十一卷 九六一 第六號 一一七

於いて人口・勞働の過剩に悩んだ地域であつて、少しく情勢の變じた現在ではその不足を訴へてゐる事例が、極めて多數に上る。故に、工業配置の急速な大變化の完遂には、人口・勞働に關して少からざる困難・

失費を要すべく、またその利害得失に就き慎重な根本的考慮を必要としやう。

第四に、現在の情勢下に於いて工業立地の急激な編成替を行ひ、人心を動かすことも如何かと思はれる。

戰闘に於いて隊形の變更が常に一危機を意味し、生産力擴充が時期方法宜しきを得なければ却つて生産力を減退せしめるが如く、工業立地の急激な編成替は多くの混雜と危懼を生じ、却つて現有能力をも低下せしめる危険がある。將來に關する大局的な國土計畫、立地計畫は勿論必要であるが、現在に於いては、多少の不利ありとするも在來の産業はこれを維持し、缺陷の痛感せられる部門の擴充適應を實現し、出來得る限り小量の犠牲を以て効果を擧ぐべく、また、人心の動搖を避け、樂んで業に勵み得る如くすることが、急務中の

急務なのではあるまいか。

要するに、我が國には高度の精密工業・機械工業、大陸には纖維工業・雜工業と云ふ立地的再編成が、我が國及び大陸の立地條件、經濟發展段階、並に現下の情勢に必ずしも適應してゐるとは思へない。東亞經濟圈に對する基本國策としては、多くの根本的に攻究さるべき問題を包藏するし、現下の急に應ずる對策としては、變化を與へ人心を刺戟し過ぎて却つて適切を缺くからである。現在に於いては、基本國策は炳乎たる大綱に止め、直ちに實行さるべき對策は更に有效適切たるを必要としやう。

四

以上は、今般發表された日滿支經濟建設要綱骨子中、産業分野に關する部分について若干の所見を述べたに止まるが、産業の性質、並に、日滿支の經濟條件を考慮せず、單なる抽象論、公式論に過ぎない點の多々存在することは、大略示し得たと信ずる。かゝる缺陷が産業分野に關する部分だけに限られてゐるとして

も、根本的に再考を要すべく、もし全體が同性質のものであれば、問題は更に多く且つ深くならう。

現在の情勢下に於いて、眞に東亞に新秩序を齎すがためには、經濟部面についても、従來と異なる擴大された視野からの新しい計畫の樹立を要することは、言を俟たない所である。併し、それは理論、經驗に合致し、實情に適合し、更に時宜に協つたものでなければならぬ。もし然らざれば、計畫が現實と遊離した誤れる抽象論・公式論に墮し、實行し得ないか、實行されるとしても、效果少くして犠牲のみ徒に大なるべきを憂慮されるからである。特に、文字通り情勢の重大にして緊迫せる現在は、人心を安定歸服せしめ、既存の設備・資材を活用し、建設計畫の樹立・遂行に眞の重點主義を採り、これを突破せねばなるまい。日滿支經濟建要綱骨子發表を見て、敢て一言する所以である。

(昭和十五年十一月五日稿、十日補)